ヤオコー会長　川野 幸夫氏 ㉖

～HISTORY～ 暮らしを変えた立役者

将来担う若者を支援

母校に奨学財団を設立

今回、「HISTORY」の私の連載の第17回でも書きましたように「お金は稼ぎ方より使い方が大切だ」と考えています。使い方にこそ、その人の生き方が出てきます。ヤオコーを世の中のお役に立つ企業にしたいと働いてきた私ですが、同じようにヤオコーの株式上場で得られた私の資産も世の中のお役に立つように使いたいと考えています。長男の死をきっかけに川野小児医学奨学財団を設立したのがその一つです。

もう一つ、日本の将来を担う有望な若者を育てたいとの思いから取り組んでいることがあります。それが私の母校、埼玉県立浦和高校の同窓会が2013年に設立した「県立浦和高等学校同窓会奨学財団」です。

私は当時、浦高同窓会の会長を務めていましたが、ある時校長先生から米ミシガン大学のサマースクールに学生3人を送りたいので、同窓会として支援してもらえないかという申し出を受けました。その時は同窓会の予算で対応しましたが、1回だけでは意義が薄れますし、3人では少なすぎます。継続的に多くの学生を海外に派遣したい、そのためには財団を設立するのが有効な方法だと思い至りました。川野財団の経験が生きたのです。

今の若者は内向き、下向き、後ろ向きと言われますが「世界のどこかを支える人材になれ」「無理難題に挑戦しろ」と志の高い、骨太の人材に、と育てられた浦高生は少し背中を押してやりさえすれば、グローバルな人材への挑戦をしてくれるはずだと考えました。私の考えを同窓会の皆さんに話すと、時代認識の確かな、インテリジェンスの高い方々ですから、もろ手を挙げて賛成してくれました。まずは一般財団として設立され、すぐに公益の認可をいただけました。

財団はOBの方々の寄付によって活動資金を賄います。一個人とか一企業による支援ではなく、多くの先輩方が応援してくれるという思いが、学生さんたちの頑張る動機になります。設立から丸6年がたちましたが、今年も300人余りの方々から1000万円近いご寄付をいただいています。寄付金が少なかった時のためにと、私はヤオコーの株式を寄付していますが、ここでもヤオコーの配当金が有効に使われています。

母校浦和高校での奨学の取り組みは広がっている（サマーセミナー助成金交付式で、前列右から3人目が本人）

私は現在も財団の理事長を務めています。私たちの取り組みがいくつかのマスコミで取り上げられたこともあり、多くの同窓会で注目されています。広島県の広島国泰寺高校（元広島一中）、福岡高校（元福岡中）、神奈川県の湘南高校、そして同じ埼玉県の川越高校などの公立高で、同じような目的の財団が設立されました。準備中の同窓会もあるとうかがっています。本当にうれしいことです。

今年度、浦高財団はミシガン大やスタンフォード大などのサマーセミナーに在学生を、そして英国ケンブリッジ大やオックスフォード大などの留学に卒業生を送り、計50人ほどの若者の支援をしています。

仮に全国の都道府県でそれぞれ1校だけでも、このような取り組みができれば、2000人を超える若者の視野を広げられますし、グローバル人材の育成になります。「企業は人」と言われますが、町おこしも、国づくりも人、特にリーダーたるべき人が重要です。将来の日本を背負っていく人材づくりのお手伝いをしていると思うと、何にも代えがたい喜びを感じます。

日本でも経済的な格差が広がっているようです。海外への留学も含めて経済的な理由から勉学を断念せざるを得ない若者がいるのは気の毒です。誰にも機会は平等に与えられるべきだと私は考えています。将来を担う若者たちの支援は、私たち年配者の大切な役割の一つだと思います。

日経MJ 2019年7月19日掲載

(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。